これからの日本の医療のあり方、社会貢献を誓う

江別医師会
川口眼科クリニック　川口　聡

今年４月、国立社会保障・人口問題研究所から、50年後までの将来推計人口について、「2065年の日本の人口が8,808万人になる」と発表されました。若者が減少し、超高齢化社会を迎える日本。少ない若者だけで日本を支えることは目に見えて不可能なことが予想される事態になりました。

戦争を経験し、生き残った人たちが、死んだ仲間の分まで生きて、日本を良くしようと頑張った世代､今の日本を作った世代がいなくなります。次に、戦争を知らない世代（ありがたいことではありますが)、戦後教育を受けた世代、核家族化、個人主義、ネット社会そういった中を生き抜いた高齢者たちに取って変わるのです。

そんな中、50年後、老年期を迎える人たちに、若者に迷惑をかけない生き方を選んでいただけるのか？　超高齢化社会は、国難と言えます。

しかしながら、日本を沈没させないためにも、健康寿命を引き延ばし、自立した老年期を過ごせる、さらには社会貢献がまだできる老人を創造するには、日本の医療、医師の役割はさらに大きなものとなるのではないかと考えています。

これまでの医療のあり方を変えるスローガンとして『病気を治す時代から、病があっても楽しく生きる時代へ』というのがありましたが､『楽しむ』にもいろいろな事柄が含まれると思っていて、働いて社会貢献する『生きがい』を感じられる高齢者を増やすことが大事になるのだろうと思います。65歳定年リタイヤは、今後無くさないとなりません。

先日、それを実践されている、90歳近くで起業された鏡味順一郎さんのお話を聞きました。『80歳、90歳は常識！　長く、生き生きと働ける会社を』を理念に、リタイヤされた高齢者を積極的に採用。日本の優れた職人の技術、匠文化の発信に工具などを扱うプロショップ（HODAKA）を経営されているそうです。

前人未到の超高齢化社会を迎える日本人の生き方は、世界の道標になるかもしれません。

先日、靖国神社へ参拝に行く機会がありました。『英霊の言乃葉』という本が目に留まり、惹きつけられて購入、拝読いたしました。戦争を経験しなかったわれわれの世代全員にぜひ読んでいただきたい内容で、自分より若い人たちが何と気高い精神を持ち合わせていたか、自国や残された家族に何を思って死んでいったかを知り、これからの自分の生き方にも少なからず影響を与えるほどの大きな衝撃を受けました。

私は眼科医ですから、中途失明を減らし、生産性の落ちる老視解決に尽力し、50年後（98歳！）にどんな生き方をしたか、先人たちに見られても恥ずかしくない人生を送って、自国、日本のことを思って、社会貢献する決意を新たにいたしました。